

浮雲

映画文学人生論

原作：二葉亭四迷（1987-89）「都の花」連載 金港堂刊
参考：坪内逍遙『小説神髓』（1985-86） 晩青堂
参考；林芙美子『浮雲』（1951） 監督：成瀬巳喜男（1955）
出演：幸田ゆき子 高峰秀子 脚色：水木洋子
富岡兼吾 森雅之 撮影：玉井正夫
おせい 岡田茉莉子 音楽：遠藤浩二

是はいつでも言文一途の事だ

『浮雲』といえば、二葉亭四迷の小説と成瀬巳喜男監督の映画が名作として知られている。映画の原作者は二葉亭四迷ではない。

順序が逆になるが、私はまず、映画を観てから林芙美子の原作を読み、最後に二葉亭四迷の作品を読んだ。

主人公は四迷作が某省の官吏内海文三、芙美子作は農林省の技師富岡兼吾。どちらも元役人で、退職してぶらぶら暮らすダメ男と似ている。

しかし、兼吾が同時に三人の女性にモテているのに、文三の恋は実らない。まるで寅さんの原型のようだが、文三には寅さんの積極性はない。いつも頭の中で悩み、うじうじしている。

叔父の家に寄宿していて、従姉妹のお勢と結婚したいと思っていた。お勢もその気があるようにみえたが、文三が失業したことを知って、態度が変わった。かわって、クビにならなかった同僚の本田昇という男がお勢に急接近して文三をいらいらさせる。人の恋路のおじやま虫だ。「アラ無情（うたて）始末にゆかぬ浮雲め」。

ここで私は「浮雲」の意味を誤解していることに気がついた。芙美子の小説には「人間というもの

の哀しさが、浮雲のようにたよりなく感じられた」という表現がある。私も空に浮かんで漂う浮雲は根なし草のように不安定な身の上の人間とい



浮雲

映画文学人生論

う意味だと思ひ込んでいたが、四迷の小説では「月にむら雲」のような意味らしい。

それはともかく、失業者の文三を無視してお勢が本田昇と結婚してしまえば、『金色夜叉』の貫一とお宮の関係のようなメロドラマになるところだが、日本初の近代小説はそうはならない。

そのうちなぜか、お勢と昇とが疎遠になり、お勢は以前のように文三をかえりみて、快気（こころげ）に笑いかけるようになる。とはいえ、本心はわからない。思いきってみよう。ダメならその時こそ叔父の家を出ていこうと文三が決心するところで終わる。（未完という説もある）。

こんな盛りあがりのない終わり方では映画化されそうもないが、そこが近代小説ともいえる。

「是はどうでも言文一途（いっと）の事だと思（おもい）立って」三玉荒神さまと春のや先生（坪内逍遙）を頼み奉って、世に問うた『浮雲』は言文一致の文体で書かれた日本初の近代小説という評価をかちとった。当初は逍遙の本名「坪内雄藏」の名前で発表され、印税の半分は逍遙が受け取ったという。

『浮雲』が刊行される以前に逍遙は春廼屋おぼろという筆名で『一読三嘆 当世書生氣質』を発表し、『小説神髓』の理論を応用した新しい小説として注目されたが、文体はいわゆる雅俗折衷体で、言文一致にはなっていない。

浮雲や言文一途の貧書生